

ノーモア・ミナマタを語り継ぎ、住みよいまちづくりを！

NPOみなまた



No.11 (2004年4月)



名護港の入り江。たくさんの鯉のぼりがさわやかな初夏の風によって泳いでいます。子供たちの健やかな成長を願って地域の方が立てたものです。地域青壮年部の方々を中心に各家庭によびかけ54匹が寄せられました。三郎の家では、リビングや廊下から窓越しに見えるこの光景を楽しんでいます。まるで、三郎の家のために立てられたよう…。



発行：NPOみなまた 発行責任者：橋口三郎 ☎867-0045 水俣市桜井町2-2-20

☎0966-62-9822 fax0966-62-1154 Eメール：npominam@fsinet.or.jp

題字：江口 睦美

(カット：くさのあき)

グループホーム『キトさん家』 ご近所みなさんに支えられて☆

1月15日のキトさん家開設よりあっという間に2ヶ月が過ぎてしまいました。2月には全室8人の方が入居されました。パタパタと何かとハプニング続出の毎日でしたがやっと少しずつ落ち着いてきました。

日当たりのいいサンルームでAさん、Bさん、Cさんと集まりいつのまにか合唱祭が始まります。「かごの鳥」「野崎小唄」と続き「蘇洲夜曲」ではAさんが泣きながら唄われるとみんな聞き入ってしまいます。



みんなでお花見に出かけました

天気のいい日にはDさん、Eさんはふたり助け合いながら近くの運動公園に散歩です。近所の人たちもウォーキングをされていて「あら散歩ですか」と気さくに声をかけてくださいます。

「まあー同級生ですがね」「よかところに入ってますねー。私たちも予約しときまっしょ。」と会話がはずみます。

海が大好きなBさんは丸島港が格好の散歩コースです。車椅子で海を見ながら「ナンマイダ。ナンマイダ。こぎゃんここに生まれた人はふのよかですな（運が良いですね）。海はあるし、空気はきれかし」そんな姿を見ていると昔のBさんに帰られてるなーと感じるひとときです。

キトさんの家は近所の方々に大変お世話になっています。家のまわりに花の苗を植えていただき、肥料まき、水やりまでいつの間にかして下さってます。

「はい！いま取ってきたばかり、つこてはいよ（使ってくださいね）」と土の着いた野菜の差し入れがあったりします。そしてスイカの苗床が近所の方の手で裏庭に準備されています。夏のスイカをみなさんと冷やして食べるのが今から楽しみです。

誕生会、節分、ひなまつり、毎日のような家族の訪問等々いろいろと催しを行ってきました。これからも入居者の方々の生活の中で私たちスタッフもたくさん学ばせていただき、地域の人に支えられて成長していきたいと思っています。



嘉松 節子（キトさん家施設長）

キトさん家のスタッフです。よろしくお願いします

キトさん家で働くようになって早2ヶ月。毎日を笑顔で仕事が出るのは入居者の皆さま、いっしょに働くスタッフから元気と笑顔をいただいているおかげです。キトさん家の皆さま（スタッフを含め）を愛しい家族のように想いながら頑張っていきたいと思います。



（吉野 麻美）

開所時より働かせていただいて、2ヶ月が過ぎました。身体的に気をつかう事が多かったですが、日に日に入居者の皆さんが明るくなれば話もたくさんして下さるようになりました。



昔の歌を教えていただいて、キトさん家のサンルームはカラオケルームのような明るさです。安心してゆっくり暮らしていただけるよう、笑顔を絶やさず頑張りたいと思います。

（田中 幸子）

私は以前ダンプの運転手をしていました。義父が身体障害者になって、毎日ホームヘルパーの方が食事介助、入浴介助にいられているのをみて介護の仕事は大変だと感じていました。反面、利用者に喜んでもらえる仕事ではないかと考えヘルパーの資格を取りました。



(森 次則)

入居者の方のペースを守り、楽しく笑顔で日常生活を送ってもらえるよう援助していきたいと思っています。これからもよろしくお祈いします。

この度、縁がございましてキトさん家に勤めさせていただいています。私は今まで白梅病院、白梅荘と介護の仕事をしてまいりましたが、またひと味違ったグル- プホ-



(橋本 富子)

ムという素晴らしいところに出逢いました。入居者の方々とのコミュニケーションをとりながら、楽しく、ここに入って良かったと喜んでいただけるように努力していきたいと思ひます。



スタッフの皆さんと入所者の方々に支えられながら、まさしくわが春をみつけ張り切っている桑原です。「50の手習い」という言葉が今の私に

ぴったりだと思ひます。心の中は「18」の気持ちで…。図々しいと思ひますが、よろしくお祈いいたします。

(桑原 初子)

入居者の方と話をしたり歌をうたったりしながら笑顔のたえない雰囲気の中で楽しく働いています。

私はボランティア先でのお年寄りの笑顔がとても印象的だったので、高校時に介護の資格をとりました。

まだまだ人生経験も少なく未熟なので、入居者の方から学ぶ事が数多くあります。これからもあたたかい雰囲気の中で、入居者の方に楽しく過ごしていただけるよう笑顔で接していきたいと思ひます。



(前田 昌江)

報告

小規模多機能ホーム全国セミナーに参加して

2月21日から2日間、熊本県山鹿市にある国指定重要文化財「八千代座」にて小規模多機能ホーム全国セミナーが開かれました。

このセミナーは、小規模多機能ホームとは何か、そして、そこで求められるケアについて議論を深めることを目的とした大会です。全国から700名近い福祉関係者の方があつまり熱気に包まれた2日間でした。

小規模多機能ホームは、通って(デイサービス)、泊まれて(ショートステイ)、家にも来てくれて(ホームヘルプ)、いざとなったら住むことが出来る(グループホーム)地域密着型のサービスです。すでにNPOみなまたでは、三郎の家や野川の家で実践されていますが、今回のセミナーを通じ24時間365日切れ目のない地域生活を支援することの大切さを学ぶことができました。

セミナーでは、柏木施設長が講師として招かれ、実技・報告セッションの分野で三郎の家での取り組みを発表することができました。

三郎の家が先進的な事業所の一つとして選ばれたことは、NPOみなまたにとっても嬉しいニュースであり、何よりもここで働く私たちに力を与えてくれました。期待されている役割を再認識し、積み重ねている日々の実践に新たな自信の芽生えを感じています。

今、来年の介護保険制度の見直しに合わせ、小規模多機能ホームの制度化への動きがあります。制度化されることによって、これまでのような個々に応じた柔軟な対応がどこまでできるのか不安が残ります。

今後も、利用者の方やご家族に喜んでいただけるよう質の高いケアを目指し、さらに努力していきたいと思ひます。

三郎の家デイサービス責任者 林 朱美

☆大人が「怨む」ということ

私は、地方都市岡山に生まれた。小学校の社会科の授業が水俣との最初の出会いである。

そのころ学校でケンカなどして負けたとき、男子児童の遠吠えの1つに「うらんでやる」があった。社会科の参考資料の写真。「怨」と白く抜いた黒い幟が幾本も風になびいていた。昭和51年に生まれた小学5年生の自分にはどうしても「人が人を怨む」ということが理解できなかった。裁判や運動を巡る当時の状況など何も知らない私は、大人が本気で人を怨むことがあるのかとショックを受けた。「うらんでやる」と発するのが怖くなった。



チッソを背景にして水俣協立病院屋上にて

☆都市という名の田舎

北の大都市札幌は、あながい田舎だ。

徳島大学を卒業後北海道大学に進み、札幌に住んで5年になる。都市などというのはどこも同じだが、モノにあふれた街はお上りさんの宝庫であって、さながら都市の形をした田舎である。（もちろん私自身も例外でないが。）

☆先進地域という意味での都会

経済学の分野から水俣病を勉強するために初めて水俣を訪れたのは3年前。失礼な話だが、水俣の第一印象は「...何も無いところだな」だった。人もいなければ、これといった店も無い。少なくとも大都市じゃないし地方都市とも言いがたい。ところが、水俣は最先端に事欠かない地域だったようだ。曾木発電所から送られてくる電気、日窒という大工場、そして先端化学がもたらされてきた。また一方で、公害・環境汚染といった負の問題もいち早く経験してきた。水俣はよくも悪くも先進的であり、その意味で都会だったのだ。

一時は5万人を超えたという水俣の人口は、もはや3万人を切っていると聞く。チッソの繁栄も今は昔。では、水俣は都会ではなくなったのか？ 答えは否だ。

☆そして、水俣

私の専門は経済学。ご存知のように経済学は主としてお金で世の中のことを考える。しかし「金額」では水俣の地域の現状も水俣病の被害も、つまびらかに描けるようには思えない。この度、水俣に約3ヶ月滞在し地域のみなさんにお話をうかがう機会を得た。

私は水俣地域の方々から、水俣病発生以前と発生当時、そして現在での日常生活の様子を尋ねて回った。食生活、お風呂の様子、交通手段、家屋の住み心地、快適な衣類はあったか、近所でのもめ事、祭、暮らしていた山・川・海の様子。私の生まれるずっとずっと前の日本のそして水俣の風景を聞くことが出来た。

その聞き取りの中で感じたことがある。過去の教訓を教育に昇華した水俣はやはり環境への意識が高く、また地域では人間関係に入ったヒビの修復が進められているようだ。さらには水俣病にかかわらずすべての人が同様の生活を享受できるしくみづくりがすすめられ、そして、医療・介護の面を中心として弱い立場の人々へのケアが進められている。そう確信した。

☆小さな大都会から学ぶ

環境教育、対立からの融和、地域福祉、そして、一番立場の弱い人々へのケア。水俣は、こういった新しい考え方の宝庫であり、実践の宝庫である。幾多の苦い経験から学び、行動に移す力を持っている。今でも時代の先端を走っているまさに都会なのである。

地球規模での環境破壊、紛争、貧富の拡大、弱者の再生産といった時代の趨勢を感じる今日、小さな大都会・水俣から我々が学ぶことはことのほか大きいと感じる。人が人を怨むような事態を二度と起こさないために。

「怨」の幟は現在、「水俣病センター相思社：水俣病歴史考証館」で実物を見ることができる。

*筆者紹介：徳島大学卒。現在、大学院生（北大・経済学研究科）。

専門は、アマルティア・センの経済学的方法論を用いた環境経済学。「環境被害とは価値ある生活の幅の縮小・剥奪であり、環境再生とはその回復と拡大である。」

大塚 健司（ワークショップ事務局・アジア経済研究所）

2004年3月20日から21日午前熊本学園大学にて、第2回環境被害救済日中国際ワークショップが開催された。これは、2001年9月に北京で開かれた第1回ワークショップに続くものである。今回は、熊本学園大学、日本環境会議（JEC）、環境再生政策研究会、中国政法大学公害被害者法律援助センター（CLAPV）、全国公害弁護団連絡会議の共催で行われ、日本生命財団とオランダ国際開発協力機構（NOVIB）からも支援をいただいた。このワークショップは、中国で大きな課題となっている公害被害者の救済と環境紛争の解決をめぐる、ボランティアな専門家集団として取り組む環境NGOであるCLAPVが、公害被害者の救済を出発点として環境紛争の解決に取り組んできた日本の経験を学びたいとして、日本環境会議に協力を求めたのをきっかけとする。



今回のワークショップでは、まず「公害被害救済はどこまで来たか」をテーマに、JEC理事長・立教大学の淡路剛久教授とCLAPVセンター長の王燦發教授からそれぞれ日中各国の歩みと課題に関する基調講演があった。続いて「公害・環境訴訟で直面する問題と戦術」をテーマに、CLAPV副センター長の許可祝副教授、貴州黔城律師事務所の趙永康弁護士の報告と、馬奈木昭雄弁護士のコメントがあった。次に「紛争処理・被害者救済制度の課題と展望」をテーマに、国家環境保護総局政策法規司行政処罰・復讐処の趙柯氏、全国人民代表大会環境・資源保護委員会法案室主任の孫佑海氏、国家法官学院客員教授・高級法官（裁判官）の李凡氏からの報告と村松昭夫弁護士のコメントがあった。最後に「公害問題解決のための法的な課題と展望」をテーマにパネルディスカッションがあり、熊本学園大学の原田正純教授、岩手県立大学の南博方教授、CLAPVの楊素絹副教授、北京市致衡律師事務所の黄蓉良弁護士、華東政法学院経済法学院院長の張梓太教授らが報告・討論を行った。また今回は韓国からも数名のオブザーバー参加があった。熊本学園大学での会議のほか、18日から2日間かけて水俣において現地見学や、水俣病被害者や水俣訴訟を支援して来られた弁護士の方々との交流が行われた。

さらに、会議終了後の21日午後には全国公害弁護団連絡会の大会や懇親会での日中韓の環境弁護士間の交流も行われた。この分野における日中韓の交流の重要性を実感した4日間であった。

事務局長のつぶやき…

昨年8月の小規模多機能ホーム「野川の家」、そして今年1月のグループホーム「キトさん家」を開設。ふたつの家建設運動では、多くの方の物心両面に渡るご支援をいただいた。

寄付、無利子の貸付、物品の寄贈等々。水俣病被害者の会、水俣協立病院等を通じて度々のお願いをした。

さらに、当「NPOニュース7号～10号」・「ふたつの家建設推進ニュース」・「水俣病被害者の会全国連会報」等による「訴え」「お願い」。

決算締切日も迫り、再度、郵便振込勘定を点検する機会があった。北海道から、沖縄まで。元環境庁長官からも。振込用紙の通信欄には、震える指先で書かれたと思われる「わずかですが、お役に立てれば…」、「年金生活なので、わずかですが…」、「父親が大規模施設からグループホームに移り人間らしさをとり戻しました。離れているので、そちらの家には入れませんが一人でも多くの方が利用できる家ができればと思います…」等々。そこにはさまざまな、思いが綴られていた。

その金額、寄付金で230万5000円・305件、無利子貸付金で1579万2000円・99件。物品の寄贈では、建物の一部、冷蔵庫、電子レンジ、温風機、食器棚、布団、タオル、食器、等々。

様々な思いが寄せられて、当ニュースでも何号かに渡って報じている「生活」が始まっている。いずれも、小規模であるが故に世間一般の経営指標で言う「スケールメリット」の恩恵に浴さない経営ではあるが、経営的に成り立ちつつある。経営でよく言われる「人・物・金」をどううまく組み合わせながら運営していくか。そこに、「気持ち・思い」が掛け合わさった事業を展開してこそ、寄せられた、「思い」に応えることだと思う。

今後とも、ご支援のほど、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

NPOみなまた事務局長 田畑 五月

☆私の嬉しかったこと☆

ひろば



孫娘が6年生の夏休みに、家族とともにわが家に遊びに来ました。しばらく本棚を眺めてましたが、やがて一冊の本を手にしていました。それは原田正純先生の『水俣の赤い海』でした。

「おばあちゃん、この本を貸してください。夏休みの宿題で読書感想文を書くの。」

わたしは嬉しくて夫に話すと「返さなくていいから、しっかり読みなさい。」と。

中学3年の秋、孫娘からビデオテープとA4用紙3枚あまりの英文の原稿が送られてきました。校内と市内のスピーチコンテストでおじいさんのことを話したというのです。

『私のおじいさんについて話したいと思います。私は彼をととても尊敬しています。私のおじいさんは鹿児島県に住んでいます。彼は84歳です。彼は毎日青い空の下で畑を耕し、日記をワープロで打っています。ところで皆さんは水俣病について聞いたことがありますか?』

そう問いかけた孫娘は水俣病の原因について話し、続いて患者の苦しみを理解しようとしていました。運動や裁判によって解決はしたが、被害者の症状が回復することはないのだと。そして、水俣病問題の解決にかかわってきた夫のことが語られていたのです。孫娘のスピーチは次のように結んでありました。

『私は彼から3つのことを学びました。(1) 私たちは二度と間違い(公害や戦争)をおこしてはなりません。(2) 私たちはお互いに助けあうべきなのです。(3) 私たちは皆地球を保護する手助けをするべきです。私はこれらのことを忘れたくないですし、皆さんにも知ってもらいたいのです。なぜなら私はおじいさんのような人々の努力を無駄にしたくないからです。』

関東に住み、何年かに一度会うだけの孫娘。その孫が夫の生き様を見ていたことが、私には驚きであり、嬉しいことでした。

梅島 愛子(元出水水俣病被害者の会事務局)

お疲れさまでした

三郎の家デイサ-ビスの責任者として。また、事務局として野川の家・キトさん家を開設する際の諸手続など大変なときに頑張ってくれた古田哲さんが3月末で退職されました。お疲れさまでした。新しい職場は実家の近くの病院です。これから、たくさん親孝行してくださいね。新しい職場での活躍を祈っています。



活動日誌(2003年1月~3月)

NPOみなまた

- 1月8日 北海道大学大学院生受入(~3月26日)
- 14日 キトさん家開所式
- 16日 NPOみなまた第6回理事会
- 2月21日 小規模多機能ホ-ム全国セミナー(~22日・山鹿市)
- 3月12日 NPOみなまた第7回理事会

関係団体

- 1月9日 全国公害被害者総行動旗開き(東京)
- 28日 水俣病被害者の会世話人会
- 2月28日 水俣病被害者の会世話人会
- 3月18日 日中韓環境紛争処理国際会議(~20日・主会場熊本)
- 21日 公害弁連総会(熊本)

~~~~~☆お知らせ☆~~~~~

☆第6回NPOみなまた通常総会

と き: 5月23日(日)13時30分

と ころ: NPOみなまた会議室

*万障繰り合わせの上、ご出席ください

☆新年度会費の納入をお願いいたします。(年会費2000円)

私たちの活動を支える大切な資金です。皆さまのご協力をお願いいたします。

編集後記

天草郡御所浦町議会が高レベル放射性廃棄物の最終処分場誘致を検討するよう、町に要請しているという衝撃的な新聞報道。これに対して水俣病被害者の会は、いち早く対応しました。海を隔てた御所浦町まで20分あまり。代表の橋口さんが貸切船をチャ-タ-して御所浦町へ撤回の申し入れに。水俣病を経験した者としてこれ以上の環境汚染を許すことはできません。

翌日、一転して「白紙に」。住民や周辺自治体からも当然のように処分場誘致への強い反対の声があがりました。